

〈論文〉

ユカタン・カスタ戦争（1847-53年）に おけるインディオの主体性について

初谷 讓次 (天理大学)

SUMARIO

Joji Hatsutani: “La iniciativa de los indios de Yucatán en la guerra de castas (1847-53).”

En la historia mexicana, se ha dado el nombre de ‘guerra de castas’ a las rebeliones indígenas que ocurrieron frecuentemente en varias regiones durante el siglo XIX. De todas ellas, la guerra de castas de Yucatán fue la más grande y sangrienta. La rebelión de los mayas que estalló en 1847 llegó a extenderse a casi toda la península. Además de su grandeza y envergadura, la misma sublevación se caracteriza por el hecho de que se convirtió en un movimiento mesiánico a medio camino. El propósito de la presente investigación es el de buscar las causas de dicho cambio y su influencia en el movimiento de los indios, analizando el proceso de la guerra.

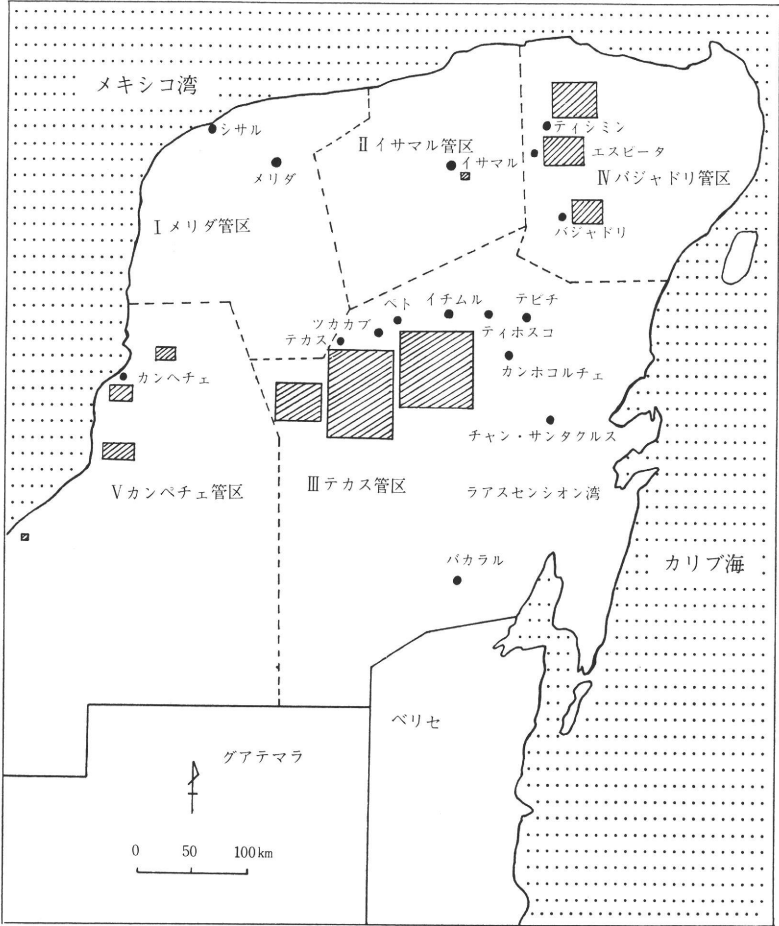
La característica más notable del primer período de la rebelión es su postura autónoma y abierta en el sentido de que los indios buscaban una solidaridad amplia. Pero, a medida que se agudiza el contraataque de los blancos, hubo entre los indios quienes tenían una postura dependiente del

poder exterior. En ese momento empezó la intervención de los ingleses. Es cierto, por una parte, que la intervención inglesa dió mayor vitalidad a los indios sublevados, por otra, que los indios perdieron la autonomía y se quedaron cerrados. No es casual el hecho que apareciera 'la Cruz parlante' en este momento. Después de que terminó en fracaso el intento de los indios de lograr la independencia con la ayuda de los ingleses, la conciencia dependiente de la autoridad exterior abrigaba la esperanza de la victoria por medio de Dios: la Cruz parlante. La identidad como 'pueblo elegido' de Dios intensificó la característica cerrada y el exclusivismo de los indios que ya existía a partir de la llegada de la carta de la Reina Victoria.

I はじめに

19世紀全般に渡ってメキシコ各地で頻発したインディオ¹⁾反乱は、一般に「カスタ戦争」(Guerra de castas)²⁾の名で呼ばれる。なかでも本稿が対象とするユカタン半島における反乱は、おそらくインディオ反乱としては参加人数、死亡者数、持続年数などの点でメキシコ史上最大の規模をもつものであるため、単に「カスタ戦争」という場合このユカタンの反乱を指すことが多い。メキシコ南東部のユカタン半島は、植民地時代を通じてインディオに対するスペイン人の支配が比較的脆弱であった地域である。ところが独立後³⁾、ユカタン州の白人⁴⁾が独自の「近代化」政策に基づいてインディオの再統合を始めたため、インディオは何らかの対応を迫られることになった。そのひとつが、1847年に始まるカスタ戦争という形であらわれたのである。さらにこのカスタ戦争は、クルス・パルランテ(Cruz parlante、もの言う十字架)の出現とともに、いわゆる「千年王国的運動」に質的転化していったことは、つとに知られている。ところが従来の研究においては、カスタ戦争開始後3年も経過してから、なぜ反乱が「千年王国的運動」に転化したのかという点に関して、意外と問題にされてこなかった⁵⁾。

地図1 ユカタン半島 (19世紀中頃)



1844年のサトウキビ作付面積1万メカーテを示す。(1 mecate = 400m² = 1/25ha)

そこで本稿では、カスタ戦争の勃発後の展開過程の分析を通じて、反乱の「千年王国的運動」への転化の原因を探り出すことを試みたい。その際、反乱を指導したインディオの姿勢という視角を設定するよう心掛けた。彼らの書簡類の内容分析に基づいて、本稿はカスタ戦争を大きく2期に分けて考察する。すなわち、反乱指導者間の対立を孕みながらもインディオが自立性を

失なわなかったカスタ戦争前期(1847年7月-1849年9月)と、インディオが外部権威に依存する姿勢をみせる後期(1849年10月以降)である。この作業の結果として、カスタ戦争の従来の歴史像に若干の修正を加えることができれば幸いである。

II 自立的反乱期

——カスタ戦争前期(1847年7月-1849年9月)——

本節で扱うカスタ戦争の前期は、さらに2つの時期に分けることができる。以下、順を追って簡略に経過を述べ、それぞれの時期(カスタ戦争前期第一期、第二期)の特徴と2つの時期を貫く共通項を抽出したい。

カスタ戦争前期第一期は、反乱の始まる1847年7月から翌年5月頃にかけてである。この時期はインディオが白人側に大きな打撃を与えることに成功した、いわば反乱の絶頂期であった。1847年7月30日のテピチ(Tepich)村襲撃に始まるカスタ戦争は激しい勢いで拡大し、翌年5月頃にはユカタン半島のおよそ3分の2が反乱軍に制圧されてしまう。この時期の白人側の危機感が如何程であったかは、ユカタン州知事サンティアゴ・メンデス(Santiago Méndez)がアメリカ合衆国国務長官ジェームス・ブキャナン(James Buchanan)にあてた書簡から知ることができる。メンデス知事は、「ユカタンで不幸な事件が生起し、我々は危機的かつ絶望的状况にある」と訴え、もし援助してもらえらば、「貴国にユカタンの主権を譲渡してもよい」⁶⁾とまで言っている。これと同様の主旨の書簡をスペインとイギリスにも発送している⁷⁾。むろん、これは実現しなかったが、主権の譲渡まで真剣に考えたユカタン州の支配層の心中は穏やかではなかったであろう。

ここで、カスタ戦争勃発時の状況を簡略に述べておく。1847年7月18日、半島東部に位置するクルンピッチ・アシエンダ(hacienda Culumpich)に大勢のインディオが盛んに食糧を運びこんでいるのを、あるアセンダードが目撃して州政府に報告した。調査したところ、ハシント・パット(Jacinto Pat)、セシリオ・チ(Cecilio Chi)、マヌエル・アントニオ・アイ(Manuel Antonio

Ay)の3名が反乱を企てていることが判明した。まず、アントニオ・アイが捕えられ、7月26日に処刑された。次いで、7月29日に政府軍はセシリオ・チを逮捕するため、テピチ村を襲撃し4人のインディオを射殺した。その場から逃れたセシリオ・チは、翌日、反乱軍を率いてテピチ村を襲撃した。これが、カスタ戦争の始まりである。

この3名の反乱指導者はいずれも村落の首長(batab)⁸⁾であり、ユカタン分離運動⁹⁾の際には、インディオの部隊(guerrilla)を率いて戦闘に参加しており、火器の使用、軍隊の統率に熟練していたと考えられる。

アントニオ・アイの死後、実際に反乱を指導したハシント・パットとセシリオ・チの間には、指導方針をめぐる対立がみられたが、この時期に尖鋭化することはなかった。ハシント・パットは、「ムラート」(mulato、「白人」と「黒人」の混血)であったが、ティホスコ(Tihosco)村の首長を長い間務め、同村近郊だけでなく、かなり遠方にまで影響力をもっていた。出自については不明であるが、かなりの資産家で、およそ1万5000～2万ペソの財産を所有していたと言われている¹⁰⁾。他方のセシリオ・チは、テピチ村の首長で、貧しかったが、東部地域のインディオに大きな影響力をもっていた¹¹⁾。

ハシント・パットは体制内の改良運動を展望しており、具体的には税の減額、荒蕪地の自由使用等を目標にしていた。したがって後述するように、白人側が提案した和平協定に積極的に応じている。地方、セシリオ・チは遙かに急進的で、体制変革的運動を展望していた。セシリオ・チの目標は首尾一貫して、白人支配の廃絶であった。このように、両指導者の反乱の目標は明らかに異なっていた。

「1847年7月30日の明け方、テピチ村住民がまだ寝静まっている頃、インディオは自分達の人種に属さない者の家を襲撃した。突然のことであった。残忍な頭目〔セシリオ・チを指す—引用者〕の命令に従って、インディオは白人、メスティソ、ムラートを殺害した¹²⁾。この襲撃から逃れた唯一の白人、アレホ・アラナはティホスコ村に行き、事件の詳細を報告した¹³⁾。報告を受けたペト(Peto)地区知事のトゥルヘケはティホスコ村住民に武装させた。イチ

ムル(Ichmul)村からは援軍が到着していた。8月7日、バジャドリからはオンガイ将軍率いる中隊も加わり、テピチ村攻撃の準備が完了した。同日、総攻撃をかけ、約半時間の戦闘でテピチ村の制圧に成功した。ただし、セシリオ・チの姿はそこにはなかった¹⁴⁾。

その時、セシリオ・チはクルンピッチ・アシエンダでハシント・パットと会合を開いていた。その席で、パットは白人を皆殺しにするというセシリオ・チの方針を批判し、改めさせようとしたが、セシリオ・チ以下その他の頭目たちはこれを断固拒否したと伝えられている¹⁵⁾。この会合でどのような話し合いがなされたかをこれ以上詳しく知る術はないが、その後の反乱の展開からすれば、両指導者が完全に決裂するまでには至らなかったであろうことはわかる。その後、反乱軍は勢力を拡大し続け、東部と南部地区の諸都市を次々に制圧していったからである。翌1848年3月には、バジャドリとソトゥータ両都市が陥落した。5月頃にはユカタン半島の3分の2が反乱軍の手に落ちた。

以上のように、セシリオ・チは白人支配の廃絶という急進的な目的を持って闘っていたが、ハシント・パットはそうではなかった。パットの思惑は、1848年4月19日に作成された「ツカカブ協定(Tratados de Tzucacab)」に如実に表われている。

この和平協定が調印されるまでの経緯は以下の通りである。1848年2月、州政府より調停委員に任命されたホセ・カヌート・ベラ(José Canuto Vela)神父は、州政府が和平交渉を行なう準備がある旨を両反乱指導者に書簡で伝えた。セシリオ・チはこれを無視したが、ハシント・パットはこれに答えて、いくつかの書簡を送付している。パットはそれらの書簡で、政府との和平交渉を歓迎する旨を伝え、セシリオ・チのやり方を批判さえしている¹⁶⁾。

4月18日、ついにツカカブ村で和平会談が実現する。翌日、ハシント・パットとカヌート・ベラ神父は和平協定を作成した。そして、4月23日、ティクルでバルパチャーノ知事はこの協定に署名し、握りが銀製の杖とユカタンの大首長(Gran Cacique de Yucatán)という金文字入りの白い綿製の旗をハン

ント・パットに贈った¹⁷⁾。こうして、「ツカカブ協定」が成立する。協定項目の概要は以下の通りである。

- (1) 人頭税の完全廃止。
- (2) 洗礼および婚礼手数料の減額。
- (3) 荒蕪地の自由使用。
- (4) インディオへの武器返却。
- (5) バルバチャーノをユカタンの終身知事とする。
- (6) ハシント・パットをインディオの終身統治者とする。
- (7) インディオの債務帳消し。
- (8) 焼酎の蒸留税の廃止。
- (9) 戦闘中止¹⁸⁾。

この協定項目を見れば、パットの思惑がよくわかる。白人支配を認めながらインディオの負担を軽減するという体制内の改良運動を展望しつつ、自分自身はインディオの終身統治者になるという野心を抱いていた。

これ程インディオ側に有利な協定をはたしてユカタン政府が実行する意志を持っていたのかは疑問である。しかし、その回答が出る前に、反乱者側が協定を破棄してしまった。この協定の内容を知ったセシリオ・チは直ちに、パットを「卑怯者」呼ばわりする書簡を送りつけ、さらに1500人からなる部隊をツカカブ村に派遣して、この協定書を破り捨ててしまった¹⁹⁾。これが「ツカカブ協定」の結末である。

この事件を契機に両指導者の間に亀裂が生じ始めたことは確かであるが、それが深まるのはもう少し後のことである。なぜなら、「ハシント・パットは新たに闘いを始める準備をした」²⁰⁾からである。まだ、共闘という路線は崩れていなかった。戦争は続き、同年5月頃にはメリダとカンペチェを残して、ユカタン半島の3分の2が反乱軍に制圧された。しかし、その直後、形勢はにわかに逆転する。

というのは、雨期が到来し、播種と除草作業の季節になったからである。ユカタン地方では、インディオは殆どが農業に従事しており、農作業を放棄

するわけにはいかなかった。大部分の反乱者は戦場を捨て、畑に帰らざるをえなかった。そこで白人側の反撃が始まったのである²¹⁾。

形勢の逆転には他にも原因があった。メリダ、イサマル、カンペチェ管区のインディオの多くは反乱に参加しなかったばかりか、白人側に立って闘う者もいたからである。例えば、カンペチェ管区のいくつかの村の首長は1847年12月附のユカタン政府あての書簡において、「我々の高貴なる人種の名を汚す東部のインディオが始めた破廉恥で馬鹿げた蜂起を全インディオの名において断固非難いたします」と述べ、政府に忠誠を誓ったうえ反乱鎮圧の手助けをする準備があると宣言している²²⁾。これに答えて、1848年1月26日、メンデス知事は、「反乱鎮圧に協力したインディオには、人頭税を免除し、また、最後まで闘った者には郷土(hidalgo)の称号を与え、戦闘で不具になった者には年金を与える²³⁾」という政令を発布した。実際、同年5月には、9000～1万人のインディオに「郷土」の称号が与えられた²⁴⁾。このように、北西部と中部のインディオは白人側に立つことに生存の道を見出している。というのは、この地域では植民地時代からスペイン人の支配が強く、インディオのメスティン化が進行していた²⁵⁾。

さて、形勢の逆転にはもう一つの理由があった。諸外国によるユカタン政府への援助がそれである。まず、1848年3月、(スペイン領)キューバから銃剣200丁、騎兵サーベル200本、12口径曲射砲2門、小型砲台数門、火薬200キンタレス(約9200kg)がシサル港に届いた²⁶⁾。次いで「グアダループ・イダルゴ条約」(1848年2月調印、5月批准)により、アメリカ合衆国との戦争の敗北が既に決定していたメキシコがユカタンへの援助を開始した。7月中頃、5隻のメキシコ船がカンペチェに入港し、現金2万8000ペソ、ライフル100丁、弾丸1万発、火薬30万kgを届けた²⁷⁾。

さて、以上述べてきた3つの理由により、1848年春頃から形勢は白人側優位になり、カスタ戦争はいよいよ前期第二期の分裂期に入る。この時期は反乱軍指導者の分裂の表面化と白人側の報復措置の開始に特徴がある。

1848年12月14日、チャン・チェン(Chan Chen)村においてセシリオ・チ

が暗殺された。妻の愛人に殺されたいが²⁸⁾、詳細は不明である。セシリオ・チの後継者は、フロレンティノ・チャン (Florentino Chan) とベナンシオ・ペック (Venancio Pec) であった。両者はセシリオ・チの部下であり、白人側と和平協定を調印したハシント・パットのやり方に不満を持っていた。一方ハシント・パットは、1849年5月のバカルル襲撃においては4000~5000人のインディオを動員するなどして、積極的に白人側の反撃と闘っていた。しかし、白人側の激しい攻撃に遭い、戦局が不利になるにつれ、ハシント・パットに対する両名の不満は増大していった。ついに、同年9月13日ベナンシオ・ペックは、バカルルから30キロほど離れたサンタローサ・ランチョにおいてハシント・パットを殺害した²⁹⁾。こうして、当初から潜在していた指導者間の対立が表面化し、一挙に爆発してしまったのである。

一方、白人側の報復措置は厳しいものであった。1848年11月6日、バルバチャーノ知事は、捕虜になった反乱者を10年間国外追放することを定めた政令を公布した。翌年3月11日、135人の捕虜がキューバに送られた³⁰⁾。捕虜をキューバに送るという計画は、1848年2月頃からあった。労働力不足のためサトウキビ栽培に有利な処女地の開発が進行せず困っていたキューバに目をつけたのは、シモン・ペオン (Simón Peón) というユカタンの白人であった。ペオンはキューバの糖業振興協会 (Junta de Fomento) に、インディオを労働力としてキューバに導入してはどうかと提案した。1848年3月4日同協会は、在ユカタン・スペイン領事にたいしてマヤ族の肉体的適応性についての調査を要請した。これに回答してスペイン領事は、マヤ族は熱帯農業に適していると報告した。計画はスムーズに進行し、キューバ総督もユカタン知事もこれを承認した。インディオのキューバへの輸出は1861年まで続き、およそ2000人が送られた³¹⁾。

以上のように、1849年5月頃から白人側の盛んな反撃と反乱指導者間の対立により、反乱者の戦意が低下していた。白人側は、この機会に一気に反乱を終結させようと、再び和平交渉を開始した。1849年秋に、調停委員として12名の聖職者が選出されて、和平交渉にあたった³²⁾。これにより反乱は一挙

に鎮静化すると思われたが、交渉はうまくいかず、逆にカスタ戦争は新たな展開を見せ始める。その最大の原因は、すでにペリセ(現ペリーズ)に定住を開始していたイギリスによる介入であった。これについては、次節において触れることにしたい。

ここで、カスタ戦争の規模を確認しておこう。表1は、1846年と1850年のユカタンの管区別人口を示すものである。この間の人口減少は直接、間接的にカスタ戦争の影響によって起こったものである。ネルソン・リードによれば、この間の減少数24万7000人のうち、8万人は反乱者で1850年のセンサスをとられた者、2万人はユカタンからペリセ、キューバなどに避難した人々であるから、差し引くと約14万7000人が戦死者である³³⁾。反乱中に行なわれたセンサスにどれ程の信頼性があるのかは疑問である。しかし、反乱が主に展開した東部のバジャドリと南部のテカスで減少が著しいのは、当然の結果であると言える。表2をみると、やはりこの両管区でのアシエンダ数の減少が著しく、カスタ戦争による被害が大きいことがわかる。

この地域では植民地時代にスペイン人の支配力が弱く、あまり労働力を必要としない牧畜エスタンシアが存在していただけで、インディオは村落内で伝統的な生活を営むことが許されていた。独立後、この地域でサトウキビ・アシエンダが発展したことにより(地図1参照)、インディオは初めてアシエ

表1 ユカタン州の管区別人口

管 区	1846年	1850年	減少数
メ リ ダ	118 839	91 299	27 540
バジャドリ	97 468	23 066	74 402
イ サ マ ル	72 096	67 423	4 673
テ カ ス	134 000	35 505	98 493
カンペチェ	82 232	82 232	0
計	504 635	299 525	247 118

Reed, *op. cit.*, p.127.

表2 ユカタン州のアシエンダ数

管区名	地区名	アシエンダ数	
		1845年	1862年
メリダ	メリダ	207	269
	ティクル	47	78
	マスカヌ	92	104
	テコー	100	n. a.
イサマル	イサマル	247	245
	モトゥル	191	191
テカス	テカス	61	53
	ペト	47	2
	ソトウータ	77	34
	バカラル	3	n. a.
バジャドリ	バジャドリ	117	7
	ティシミン	39	7
	エスピータ	37	41
カンペチェ	カンペチェ	} 123 ^a	130 ^b
	エセルチャカン		
	オペルチェン		
	セイパプラージャ カルメン		

a. 1846年のカンペチェ管区の総アシエンダ数

b. 1877年のカンペチェ州の総アシエンダ数

González Navarro, *op. cit.*, p.177, Víctor Molina Suárez, *La evolución económica de Yucatán a través del siglo XIX*, Mérida, Ediciones de la Universidad de Yucatán, 1977, Tomo I, pp.118-119 より作成。

ンダとの緊張関係を経験した。具体的には、人口が増大する一方で、公有地政策により使用可能な土地が制限されたため、インディオにアシエンダでの季節労働による収入補完の必要が生じたことである。これが、カスタ戦争の

最大の原因となるが、公有地政策に基づくサトウキビ・アシエンダによるインディオからの土地収奪はインディオ共同体の解体を迫るものではなかった。

というのは、反乱は共同体を基盤にして展開したからである。首長を隊長とする村落単位の部隊によって反乱軍は構成されていた³⁴⁾。また、反乱には、「ワイト(huit)」と呼ばれる集団も参加していたと言われている。ワイトとは、白人支配を逃れ、半島東部の密林地帯で独自の生活を営む集団である。1840年頃、6000~2万人のワイトが存在したらしいが、正確な人口はもちろん不明である³⁵⁾。

では、なぜ多数の村落が数人の指導者の下に結集したのだろうか。以下では、カスタ戦争前期の特徴の考察からこの問題に接近していくことにする。

カスタ戦争前期の特徴は、インディオの自立性である。この時期には、カスタ戦争後期に見られるような外部権威に依存する姿勢は見られなかった。例えば、ベリセのイギリス人との関係は対等なものであった。イギリス人とインディオの間には、武器の販売者と購入者という関係しかなく、インディオがそれ以上の何かを期待するということではなかった。また、カスタ戦争後期に見られる「千年王国的運動」のように超自然的な力に頼ることもなかった。白人側が危機的な状況のなかで新しい宗主国を求めたのとは対照的に、この時期のインディオは自力で闘っていた。こうした自立性を生み出した原因は、独立後の権力の不在状況ではなかったかと思われる。すなわち、教会権力の没落がそのひとつである。ユカタンにおける教会権力の没落は、メキシコの他の地域に比べて早かった。ユカタンでは、フライ・ルイス・デ・ピーニャ・イ・マソ(Fray Luis de Piña y Mazo)司教の治世〔1776-79年〕に教会財産の接収が実行されている。1820年には、フランシスコ修道会原始会則派の25の修道院が廃止されている³⁶⁾。また、1841年のユカタン新憲法では、信仰の自由と、教会特権の廃止が定められている。そして、1843年には教会維持費が州財政に組み込まれた³⁷⁾。以上のように、18世紀のブルボン改革の時代から自立的経済的基盤を奪われていたユカタンの教会は、独立後の

自由主義政府の攻撃を受けてさらに弱体化した。

1848年2月19日、反乱軍分隊長数名の連名によりユカタン司教と二名の教区司祭にあてた書簡³⁸⁾を見てみよう。「貴方がたおよび司祭様がた〔聖職者一般を指す：引用者〕に申し上げます。知事様が我々の殺害を開始した時になぜ貴方がたは異議を唱え警告を発することをなさらなかったのでしょうか。白人が我々を殺戮している時に、なぜ貴方がたは我々のために決起しなさらなかったのでしょうか」。

ここから読みとれることは、インディオが聖職者は自分達を保護すべき存在であると捉えていたということである。そして、その期待を裏切った具体例として、「エレラ神父はひとりの哀れなインディオに自分の鞍をつけその上に自らまたがり、鞭を打ち、とがり拍車でそのインディオの腹部を傷つけた」ことを挙げて、教会に対する不満を表現している。また、反乱過程で、インディオは多くの聖職者を殺害し教会を破壊した³⁹⁾ことも、教会に対する不満の表われであろう。カスタ戦争が単に植民地時代に回帰するという復古主義的な反乱でなかったことは、こうしたインディオの教会からの離脱傾向からも読みとれる。

一方、教会の弱体化に成功した州政府の方も、派閥争いを繰り返しており、独立後、特に1840年代の分離運動以降、政情は極めて不安定であった。この分離運動の際にインディオは再三にわたって約束を破られており、州政府に対する不信感を募らせていた。

このように、アシエンダの攻勢にさらされ、インディオが強力な調停者となるべき権力を最も必要としている時に、その役割を果たしうる権力、もしくはその役割を果たすとインディオが期待しうる権威がユカタンには存在しなかった。こうした権力・権威の不在状況——かつて身分制的植民地体制に正当性を与えていた王権や教会がインディオの「保護者」であるという幻想の崩壊——が、インディオ社会の内部から出た指導者が超村落的な存在として全面的な信頼を得ることを可能にし、外部権威に依存しない自立的な闘争の可能性を与えたのではないだろうか。

また、反乱に参加したインディオの白人に対する不満は雑多なものであったろう。その不満を怒りにまで高め、反乱者に反乱の正当性を与えたものは何だったのか。この役割を果たしたのは、1847年7月29日にアントニオ・トゥルヘケ (Antonio Trujeque) 将軍率いる政府軍が行なったテピチ村とティホスコ村への襲撃である。この事件が、反乱に参加したインディオに自己の行為=武装蜂起が正当なものであるという意識の根拠となった。先に引用した反乱軍分隊長の書簡には次のように記されている。「最初に貴方がたが我々を殺害したから我々はその仕返しとして貴方がたを殺害しています。我々が白人の家屋やアシエンダに放火するのは最初に貴方がたがテピチ村や貧しいインディオの住むランチョを焼き払ったからです」⁴⁰⁾。また、ハシント・パットはベラ神父あての書簡で、「今回の蜂起はアントニオ・トゥルヘケ氏が始めた殺戮から身を守るためのものでした。ここティホスコ村の広場で、村人たちを縛りつけようとして加えられた暴行を見た時に彼らは蜂起したのです。テピチ村の放火も同様です。発端はスペイン人の方々が森であたかも獣を捕えるごとくインディオに縄をかけようとしたことです。トゥルヘケ氏の命令により多くの者が殺されました」⁴¹⁾と述べている。以上のように、トゥルヘケ軍による襲撃がインディオの蜂起を正当化する象徴的な事件として捉えられていた。むしろ、この襲撃以前から反乱の計画が存在したのだから、この事件がカスタ戦争の原因とは言えないが、少なくとも反乱者は「白人が先に手を出した」という自己正当化の意識を持っていた。

以上のように、白人に対する不満と怒りという共通の意識を持って反乱に結集したユカタンのインディオは、さらに大きな連帯を追求した。「1848年初頭、オアハカ州のソヤルテペク村に、ユカタン・マヤ族の使者が来て、当地のミステカ族に白人との戦争の共闘を要請した。オアハカ州南部とゲレーロ州方面にも使者が派遣されているとのことであった。ソヤルテペク村の代表フアン・エステバン (Juan Esteban) はもう少し様子を見てからにしたいと答えた」⁴²⁾。また、同じ頃メキシコ最南のチアパス州にも同様の使者が来たことと記録されている⁴³⁾。結局は実現しなかったとはいえ、これは、言語を規準にした

「ユカタン・マヤ族」という枠組を超える連帯がカスタ戦争において追求されていたこと、もしくはこのような枠組が実際には存在しなかったことを意味している。

以上のように、カスタ戦争前期は、指導者間の対立度という観点から二つの時期に区分できるが、インディオの自立的解放闘争という点において一貫していたと言えよう。このようなインディオの主体性に変化が生じるのは、次節で扱うカスタ戦争後期においてである。

III イギリスの介入と反乱の「千年王国的運動」への転化

——カスタ戦争後期(1849年10月以降)——

まず本節ではカスタ戦争後期について、順を追って経過を述べつつ、この時期の特徴を浮き彫りにしていきたい。

セシリオ・チとハシント・パットが舞台から姿を消してから、反乱軍内部に混乱が生じていく。政府軍はこの機会を利用して、一気に反乱鎮圧を狙って多くの軍勢を投入した。それと同時にユカタン州政府は、調停委員として12名の聖職者を任命して、再び和平交渉を開始した。1849年10月のことである。こうして反乱は一挙に終局に向かうと思われたが、予想を裏切って新たな展開を見せ始める。

まず、反乱軍に降伏を勧告したバルバチャーノ知事の書簡に対するフロレンティノ・チャンとペナンシオ・ベックの回答を見てみよう。1849年10月9日附けの書簡⁴⁴⁾において、両名は、「何らかの和平交渉が開始されることを心から歓迎します」と述べつつも、「再びメリダ政府 [=ユカタン州政府] に服従することはできない」と断言している。その理由として、(1)メリダ政府は約束を実行しないばかりか、インディオに対し「驚くべき残虐行為」を働いている。(2)「イギリスの方々 [ベリセ在住のイギリス人を指す：引用者] の政府がすでに我々を保護し、多大なる恩恵を与え始めているからでもあります。それゆえ部下達の間では、イギリス人の命令に従うという気持ちが表われ始めています」という2点を挙げている。ユカタン州政府に対する非難は

以前から見られるが、イギリス人についてインディオが言及したのはこれが初めてである。しかも、自分たちを保護する存在として捉えている。このことは、インディオが外部権威に依存するという姿勢を見せ始めたことを意味しているといつてよいだろう。

では、インディオ側が理解する「和平」とはどのようなものなのだろうか。両名は次のように言っている。「和平の実現によって、神が我々を愛するごとく、我々も愛し合うことができるように、この土地の分割に同意して下さい。私の部下達はこの土地の古いインディオの慣習に従って、自分達の政府を復興させるという目的で、自分達の統治者を自分達の中から任命しており、その者たちの命令にしか従わないことを御承知ください」。要するに、インディオ側の言う「和平」とは、ユカタン州政府からの分離・独立をその内容としている。このように、インディオが「土地の分割」、「自分達の政府の復興」という具体的な表現を用いて、分離・独立を要求したのは、カスタ戦争開始後初めてのことである。

さらに両名は次のように言っている。「我々は、貴方がたに服従している村に介入するつもりはありません。メリダ政府は自己に服従している村と協力してやっていけばいいのです。そして、東部地域の政府〔インディオ政府を指す：引用者〕は、自己に従う村と協力してやっていきます」。広範な連帯を追求していたカスタ戦争前期とは対照的に、分離主義的傾向がうかがえる。これも初めてのことである。

さて、以上のように2人の指導者の書簡から幾つかの重要なポイントが浮び上がってくる。そこから読みとれるインディオの意識や姿勢に、本節の対象とするカスタ戦争後期の基本的な特徴がすべて表われていると言ってもよい。

先に見た書簡の日付け(1849年10月9日)から幾日かしてから、イギリス女王の書簡が反乱軍に届いたとのことである。同年10月26日付けの反乱指導者の書簡⁴⁵⁾に、「イギリス女王の書簡が届いたことを貴方にお知らせします」と記されている。この書簡を直接確認することはできないが、上記の反

乱指導者の書簡から、ある程度その内容を知ることができる。書簡はこのように言っている。つまり「ユカタンの地は分割されるでしょう。だから、兵士を鼓舞して敵との戦いを強固にするようにと隊長たちに働きかけてください……足りないものは何もないとイギリス人は言っています。もし火薬が必要ならば100アローバでも500アローバでも有るし、もし弾丸が必要ならばいくらでも有るとのことです」。以上より、おそらくイギリス女王の書簡は、インディオの独立にたいしてイギリスも尽力する旨を伝えたものであろう。

また、イギリス側は反乱指導者との会見を申し入れたようである。1849年11月22日、ベリセ総督ジョン・ファンコート (John Fancourt) と反乱指導者ベナンシオ・ベックの代理人が、ユカタン半島東海岸 (現キンタナロー州) のラアスセンシオン湾 (Bahía de la Ascensión) 付近において会見しているからである⁴⁶⁾。その席でインディオ側は、メキシコから分離した領土を獲得できるようにメキシコ政府と交渉して欲しいと総督に依頼した。総督は、イギリス政府の承認を得ずに交渉を始めることはできないと答えた。イギリス政府にその旨を伝えたところ、イギリス政府はその交渉についてはベリセ総督に全権を委任すると回答した⁴⁷⁾。この会見のあとベリセ総督は、同年12月1日附けのユカタン知事あての書簡で次のように言っている。「インディオはユカタン州政府との約束には何の信頼も持っていません。政府は一度も約束を果たしたことがないからです。インディオは自分たちの独立政府が保証されない限り、いかなる協定にも満足できないと言っています。インディオは領土の一部を獲得したいと思っています。〔ユカタン州の南東部の都市〕バカルル (Bacalar) から北へメキシコ湾までラインを引き、その東側を州政府から税を徴収されない地区にしたいと言っています。その領土内に白人が居住することについては問題はないが、その地で権力を行使することはできないということです⁴⁸⁾。要するに、ベリセ総督はユカタン州政府にインディオの独立を勧告しているのである。もちろん、パルパチャーノ知事はこれをはっきりと拒絶した。

ここで、イギリスの介入の意図を理解するために、イギリスが中米進出の

拠点としていたベリセをめぐるイギリスとスペイン(後にメキシコ)の外交関係を簡略に見ておこう。

17世紀中頃、ジャマイカのイギリス人が染料木伐採の目的でベリセに移住を始めた。1786年には、スペインとイギリスの間で「ロンドン条約」が締結され、ベリセの領土権はユカタン総督領に属すが、染料木の伐採権と運搬権はイギリスに与えられることが定められた⁴⁹⁾。メキシコが独立して5年後の1826年には、メキシコとイギリスの間で、「友好、通商、航海条約」が締結され、「ロンドン条約」のベリセに関する項目が有効であるとされた。つまり、ベリセはユカタン総督領からメキシコ領となった⁵⁰⁾。イギリスにとってベリセは染料木やマホガニー材の宝庫として重要であったが、ラテンアメリカの独立後はとりわけ中米貿易の拠点としての重要性を増していった。イギリス帝国からベリセへの輸出額は、1806年には3万ポンドであったが、1829年には80万ポンドに増加している。この大部分が中米やユカタンに再輸出されていた⁵¹⁾。

そして、1847年にユカタンでカスタ戦争が勃発した際、イギリスは間接的な方法で、また厳密に言えば国際法に反する方法で、ベリセの領土権を得るためにメキシコ政府に圧力を加える機会を得た。イギリスは反乱軍に武器を販売したのである⁵²⁾。1849年3月12日、メキシコ外務大臣はイギリス公使パーシィ・ドイル(Percy Doyle)に書簡を送り、ベリセのイギリス人によるインディオへの武器販売を中止するよう直ちにしかるべき措置をとることを要請した。前述の「ロンドン条約」でインディオへの武器の輸出が禁止されていたからである⁵³⁾。ドイル公使はこの書簡にたいする返信で、1826年のメキシコとイギリス間の条約において「ロンドン条約」に定めるイギリスの権利はそのまま有効であることは定められたが、「ロンドン条約」をイギリスが実行するようにメキシコが要求できるとは定められていないと主張した⁵⁴⁾。また、1849年12月15日附けの書簡で、イギリス公使ロード・パーマーston(Lord Palmerston)は、イギリス政府はベリセに関してメキシコがスペインの継承者であることには同意しないとまで言っている。つまり、ベリセに関

してのメキシコの領土権を否定したのである。この書簡はイギリスのベリセ政策の一時代を画すものである⁵⁵⁾。

前述のように、ちょうどこのような時期にイギリスのカスタ戦争への外交上の介入が始まっている。イギリスはベリセの領土権を狙うとともに、あわよくば、ユカタンのインディオ独立国の保護国となろうとしたのであろう。この計画はかなり前からあったものと思われる。1848年3月24日、合衆国の新聞『ニューヨーク・ジャーナル・オブ・コマース (*New York Journal of Commerce*)』に、ベリセからの匿名の書簡が掲載されている。その書簡は次のように言っている。つまり「[インディオは：引用者]モクテスマの時代〔先スペイン期：引用者〕に所有していた領土を取り返そうとしているのである。(中略)。4月9日に、インディオはチチェン・イツァにおいてティクル・シオ (Ticul Xio) という名前のインディオの王を選びだしている」⁵⁶⁾。ベリセから送られて来たというこの匿名の書簡について詳細は不明だが、1848年の時点で、イギリスがユカタンのインディオ独立国の保護国になるという計画を持っていた可能性が強い。インディオが王を選出したという資料は残されておらず、イギリス側のデマであろう。

一般には、19世紀中頃のイギリスの一連の中米政策は、当時中米進出を図っていた合衆国の牽制を目的としていたと言われている。とりわけ、1848年の合衆国におけるゴールド・ラッシュを契機に浮び上がったニカラグアの両洋結合運河計画をめぐる、中米におけるイギリスと合衆国の角逐が尖鋭化した。そして、同年に行なわれたイギリスによるサンフアンデルノルテ(サンフアン川河口にあり、同運河の起点となる地域)の軍事占領は、合衆国の牽制を目的とするイギリスの戦略的意図が明白である。もちろん、カスタ戦争への介入は、ひとつにはイギリスの中米での活動拠点としてベリセの領土権獲得を目的に、メキシコに圧力を加えるためのものであった⁵⁷⁾。

ところで、イギリスによるカスタ戦争介入にはもう一つ別の理由も考えられる。それはベリセの農業および労働力の問題である。カスタ戦争が始まってから、多数のユカタン州住民がベリセに移住したことは先に述べた。ベリ

セ総督は、インディオ独立の勧告が拒否されたあとの1850年1月25日附けのユカタン州知事あての書簡で、もしインディオの独立が認められないのなら、インディオのベリセ移住を受け入れる準備があると述べている⁵⁸⁾。また、1852年にはベリセ総督は、ユカタンからの移民を大いに歓迎すると述べている。ベリセは農業が未発達な地域が多く、ユカタンからの移民がすでに農業を始めていることは、ベリセにとって望ましいというのがその理由であった。実際、ユカタンからの移民が始めたサトウキビ栽培はその後発展を遂げ、1857年には輸出するまでになっている⁵⁹⁾。また、1849年12月12日附けの反乱軍分隊長にあてたベナンシオ・ベックの書簡⁶⁰⁾を見ると、「ベリセの総督様が請求している、我々すべての村の住民名簿を作成する……」というくだりがある。すなわち、ベリセ総督は反乱軍の人数に関心を示している。カスタ戦争開始以来行なっているインディオへの武器販売から、インディオ独立および移民の受け入れの要請というイギリスの戦略変更の意図が、労働力獲得にあることは明白である⁶¹⁾。

さて、ベリセ総督との会を終えた反乱者側は、ユカタン州政府の和平会談の申し入れを受け、自分たちの要求を実現して戦争を終結させようとした。反乱軍指導者フロレンティノ・チャンは、1849年11月30日附けのユカタン知事あての書簡⁶²⁾で、ユカタン州政府との会談を実現させるために、「ビクトリア女王の書簡を受け取って以来、私は軍隊を出動させなかった」、ところが、「戦争を終結させる会合を持つために政府軍は出動を中止したという調停委員の手紙は偽りで、実際にはティシミン、カロトゥムル、ティホスコ村に駐屯する政府軍は貴方の命令に従っておらず、インディオに危害を加えている」と訴えている。そして、反乱軍もこれ以上戦いを続けることを望んでいないのだから、早く戦争を終結させるための会談を持てるように、政府軍は攻撃を中止するようにと頼んでいる。ここでは、「ビクトリア女王の書簡を受け取って以来」というくだりに注目したい。つまり、これが和平会談を持とうと思った動機なのである。先に引用した同年10月26日附けの書簡⁶³⁾をもう一度見ておこう。次のように言っている。「イギリス女王の書簡が届いたこと

を貴方にお知らせいたします。ユカタンの地は分割されるでしょう」。きっとイギリス政府が自分たちの要求が実現されるように調停してくれるから、ユカタン州政府の和平会談に応じよう、といった意思がここには読みとれる。

このように反乱軍は、州政府の和平交渉に応じる姿勢を見せたが、結局、和平会談は実現しなかった。政府軍が攻撃を中止しなかったからである。反乱指導者フロレンティノ・チャンは部下にあてた同年12月30日附けの書簡⁶⁴⁾において、「我々の敵が提案した和平協定はみごと失敗しました。敵は我々を欺いていただけなのです。敵は話し合いのために戦いを中断するということはしませんでした」と述べている。アンコーナによると、こうして和平会談が失敗したあとも、ペックはイギリスが最終的には自分たちに勝利をもたらしてくれるという望みを捨てなかった。そして、直接ロンドンを訪れてビクトリア女王と会見するという計画をたて、そのための資金を集めようとしたとのことである⁶⁵⁾。

インディオを独立させてその保護国になるというイギリスの試みは成功しなかったとはいえ、1849年末のイギリスの介入はカスタ戦争の展開に少なからぬ影響を与えたと言えるだろう。カスタ戦争前期の特徴がインディオの自立性にあったことは前節で述べた。それがカスタ戦争の後期になると、イギリスという大きな権威が反乱者の前に現われる。カスタ戦争前期に劣勢だったユカタン支配層が盛んに新しい「宗主国」を求めたように、劣勢に陥り、新しい「宗主国」もしくは強力な調停者を求めていたであろう反乱者の前にイギリスという新しい「宗主国」が現われる。これまで単に武器の販売者であったイギリスが、調停者もしくは保護者とみなされるようになる。1849年末の和平会談が失敗したあと、反乱軍は徹底抗戦という姿勢を見せたことから、イギリスの介入が反乱軍に新たな活力を与えたという側面はもちろんある。しかし、保護者もしくは調停者的な存在としてのイギリスが手を差し伸べたことによって、インディオの自立性が奪われたという側面も看過できない。

さて、イギリス介入による反乱軍の活性化については、自分たちの背後に

はイギリスという大きな権威が存在するという自信を反乱者に与えたということの他に、イギリス人という異邦人が保護者として現われたことによって、州政府並びにユカタンの白人に対する不信感が助長されたという側面があるだろう。この州政府とユカタンの白人に対する不信感、もしくはほとんど嫌悪感といってもよいものは、和平会談を持つと言いながら政府軍が攻撃を中止しなかったことによってさらに深まったと言える。和平会談が失敗する直前の1849年11月18日、反乱軍指導者数名による連名の書簡⁶⁶⁾は次のように述べている。「これ〔調停委員の書簡：引用者〕を受けとった時は大変な喜びを感じました。ただし、これは貴方がたが手紙に書いたことを実行する限りにおいてです。なぜなら、キリスト教徒が一度口にしたことを実行しないことは大変悪いことだからです。また、最初に蜂起した時、スペイン人は約束を実行しませんでした。ここに我々と貴方がたの紛争の原点があるのです」と、反乱者側が事前に忠告しているにもかかわらず、州政府は再び約束を破るのである。州政府に対するこうした不信感は、1850年5月頃頂点に達する。

1850年4月頃から、ユカタン南部地域の反乱指導者ホセ・マリア・バレラ(José María Barrera、マセドニア・ゾル村の首長で人種的には「メスティソ」)も政府と和平交渉を始めていた。バレラは、調停委員司祭にあてた1850年4月7日附けの他の指揮官との連名の書簡⁶⁷⁾で、次のように言っている。「軍隊を撤退させてください。そうすれば、我々が貴殿と話し合うことも可能です。(中略)すぐに軍隊を撤退させてください。もう二度と言いません。貴殿は十分御存知のはずです。貴殿も軍隊もとるべき措置を考えてください。そうでないと、兵士はそこでみんな死んでしまうことになります。以上が私の返事です。もし貴殿の軍隊が約束を破るようなことがあれば、貴殿は、私が言ったことが本当であったことを思い知るでしょう」。この「私が言ったこと」とは、「たとえ10年続いたにしても、貴方がたを皆殺しにするか我々がみんな死んでしまうまで闘いを続けるつもりです」というくぐりであろう。これはいわば反乱者側の最後通牒であった。

こうして反乱者側は、調停委員のカヌート・ペラ司祭と5月4日カンポコ

ルチェ村において和平会談を持つことになった。しかし、和平会談はまたしても実現しなかった。政府軍の総司令官マヌエル・ミチュルトレーナ (Manuel Micheltorena) が、武力で反乱軍を完全に鎮圧せよと命じたからである。反乱者側は政府軍の攻撃を受けたため、会談には出席しなかった。この時、ホセ・マリア・バレラとフロレンティノ・チャンが会合を開き、政府との和平交渉に応ずるかどうかという話し合いを行なった。その結果、白人は、インディオから武器を奪い、以前の状況に戻すことしか考えていないのだから、徹底抗戦するしかないということで意見が一致したためである⁶⁸⁾。こうして和平交渉は完全にこじれ、再び熾烈な戦闘が始まった。このあと、反乱はいよいよ「千年王国的運動」に転化していくことになる。

政府軍の激しい攻撃を受けて、密林地帯 (selva) に逃げ込んだホセ・マリア・バレラは、そこで自然井戸 (cenote) を発見した。そばには、1本のマホガニーの木があり、その幹には小さな十字架が刻まれていた。そこで神託を聞いたバレラは、そのマホガニーの木でクルス・パルランテ (もの言う十字架) を作った。クルス・パルランテは、マヌエル・ナウト (Manuel Nauat) という名の腹話術師を媒介にして神託を告げた。白人に対する闘いを続けよ、と。1850年10月頃のことである。その後、その地にはクルス・パルランテを祀る教会が建設され、チャン・サンタクルス (Chan Santa Cruz, 小さな聖なる十字架) と呼ばれ、闘いを続けるインディオ (クルソブ) の聖地となった。その後、チャン・サンタクルスを中心に密林地帯には、自立したクルソブの社会が形成された。1853年には、およそ4万人のクルソブが、異邦人の絶滅とマヤ族支配の復活を約束するクルス・パルランテの神託に従って闘いを続けていたと言われている⁶⁹⁾。

これほど多数のインディオがクルス・パルランテの神託を受け入れた理由については、次のように言われている。(1)何らかの聖像を媒介として託宣が降下するという儀礼は前スペイン時代に存在しており、植民地時代にも続行されていたこと⁷⁰⁾。(2)クルス・パルランテの神託は、表面的にはカトリック的色彩が濃い、内容的にはマヤ族の伝統的宗教の要素が強く、そこにみられ

る千年王国的要素は、植民地時代からユカタンのインディオの間で伝承されていた神話『チラム・バラムの書』の予言に基づくものであったこと⁷¹⁾。

そして、反乱指導者が運動を宗教的なものに転化させた点について、ブリッカーは、白人側の反撃→形勢逆転→指導部の対立→チとパットの暗殺→クルス・パルランテ出現という図式で描いている⁷²⁾。確かにこの通りなのだが、この図式にもう一つのステップを置く必要があるだろう。それは、1849年末以降のイギリスの介入である。

イギリスの介入の積極的な受け入れは、反乱者が自分たち以外の外部権威に依存する姿勢を見せ始めたことを意味することについては、先に述べた。神という超自然的なものの介入を期待する「千年王国的運動」も、何らかの権威に依存するという姿勢に関しては同じだと言えるのではないだろうか。白人側の激しい反撃を受け、方針の違いによる対立も表面化し、浮足立っていた反乱指導者達の前に、イギリス(ビクトリア女王)という大きな権威が現われた。イギリスの介入にたいし、土地の分割、ユカタン州政府からの分離・独立という過度の期待を反乱者は寄せるが、結局その期待も破られた。反乱者に残されたのは、ユカタン州政府と白人に対する強い不信感と何らかの権威に依存したいという願望だけだった。ちょうどこのような時期に、クルス・パルランテが現われている。このように、イギリスの介入が、反乱の「千年王国的運動」への転化の大きな要因となったと言えよう。

こうして、最終的には白人が絶滅し、マヤ族支配が復活するというクルス・パルランテが下す神託の千年王国的内容が、反乱に活力を与え、チャン・サンタクルスを拠点とするゲリラ戦は20世紀初頭まで続くことになる。この間クルソブは、白人支配からの独立状態を維持し続けたことからすれば、反乱がある程度まで現実的成果を納めたと言えるであろう。ただし、クルソブの占領した地域が、白人にとって経済的に利のうすい密林地帯であったことも考慮する必要がある。つまり、逆に白人側からすれば、反乱分子を密林地帯に追いやったとも考えられるのである。この地域が極めて生活環境の悪い地域であったことは、人口推移を見ればわかるであろう。1853年には4万人い

たクルソプが、1904年には1万人に減少している。ペリセに移住した者や戦死者もいるが、多くは流行病や飢えで死亡している⁷³⁾。しかし、半世紀にも渡って独立状態を維持したクルソプの力量を過少評価することはできない。

このように、クルス・パルランテが反乱を活性化したという側面とは別に、ここではもう一つの側面に注目したい。それは、反乱を閉鎖的なものにし、運動の分裂を招いた点である。この兆候は、既にイギリスが介入した時点で見られた。先に引用した反乱軍指導者の書簡の一節をもう一度見ておこう。「我々は、貴方がたに服従している村に介入するつもりはありません。メリダ政府は自己に服従している村と協力してやっていけばいいのです……」⁷⁴⁾ というくだりである。こういった排他主義的傾向は、クルス・パルランテの出現によって一層強化される。超自然的な力であるクルスの守護を受ける自分たちを「選民」と意識するようになるからである⁷⁵⁾。つまり、超越的権威に従わない者を排除するという閉鎖性もしくは排他性を生み出したのである。

クルス・パルランテに従わなかった南部地域のインディオ集団は、1853年にユカタン州政府と和平協定を調印した。その後、この集団は、クルソプから何度も攻撃を受けることになり、両者の間には埋めがたい溝ができてしまった⁷⁶⁾。

IV 結 語

ユカタン州独自の「近代化」と分離運動を原因に始まったカスタ戦争の特徴は、前期においては、外部権威に依存しないという意味での自立性と広範な連帯の可能性であった。一般に植民地時代には、横の連帯を防ぐためにインディオが教区単位に分断されていたと言われるだけに、特筆に値するだろう。

ところが、政府軍の激しい攻撃を受けて士気を喪失しかけていたインディオの前に、イギリス(ビクトリア女王)という大きな権威が現われた。イギリスの介入により活力をとりもどしたインディオは、州政府と積極的に交渉を

進めようとするが失敗に終わる。この時期にクルス・パルランテが出現したのは、決して偶然ではない。イギリスの介入により外部権威に依存するという意識が高まり、それが超自然力の介入による反乱勝利という期待につながったのである。その結果、運動が活性化したことは確かだが、前期にみられた自立性や広範な連帯の可能性が失なわれたことも、また事実である⁷⁷⁾。

註

1) 本稿では、インディオという語を以下の意味で用いる。すなわち、スペイン人による征服以降現在に至るまで、近代ヨーロッパ的価値体系への完全同化を拒むために、あえてそれを部分的に受け入れ、抑圧と差別の構造の最底辺で共同体を基盤に生活してきた原住民集団。

2) 「カスタス(castas)」という語は、ラテン語の「カストゥス(castus)」「(「純粹」の意)に由来するロマンス語系の言葉で、一般に動物の種類をさす。しかし、当時のメキシコ支配者層は、人種概念をもつ「インディオ」と同義でこの語を用いた。したがって、「カスタ戦争」は「インディオ」の反乱と同義であると考えてよい(Leticia Reina, *Las rebeliones campesinas en México (1819-1906)*, México, Siglo Veintiuno Editores, 1980, pp. 14-45)。また、「カスタ戦争」が当時の支配者側の人種的視点(反乱者=「インディオ」)に基づく呼称であったことは、例えば、当時のユカタン州の支配者の1人であるフスト・シエラ・オレリーが「カスタ戦争」について書いた次の言葉でもよくわかる。「野蛮人どもめ(ii los salvajes !!), 卑しい畜生ども(brutos infames)は、流血騒ぎ、放火、破壊を思う存分に行なっている。今、私はこの劣悪な人種(raza maldita)が消え失せ、二度と我々の前に現われないことを切に望んでいる」(Justo Sierra O'Reilly, *Diario de nuestro viaje a los Estados Unidos, 1847-48*, México, Edición Antigua Librería Robredo, 1938, p. 30)。

もちろん、実際にはカスタ戦争は人種にかかわらずなく、こうした差別に甘んじながらも共同体でインディオとして生きる人々の反乱であった。

3) 1821年9月15日、ユカタン地方(Provincia de Yucatán)の暫定評議会(Junta)はスペインからの独立を宣言すると同時にメキシコへの併合を承認した。1824年のメキシコ共和国憲法は連邦制を謳い、ユカタン半島〔現在のユカタン州(Estado de Yucatán)、カンペチェ州(Estado de Campeche)、キンタナロー州(Estado de Quintana Roo)を含む〕はメキシコ連邦共和国の一州(ユカタン州)となった。その後、1862年にカンペチェ州が分離、1902年にキンタナロー直轄区(1974年に州となった)が分離した。したがっ

て、本稿でユカタン州と言う場合ユカタン半島全域をさす。

- 4) 以下使用する白人という語は、むろん人種的概念ではなく、非インディオ (ladino) セクターの中の支配者集団をさす。
- 5) 主なものは以下の通りである。Moisés González Navarro, *Raza y tierra, la guerra de castas y el henequén*, México, El Colegio de México, 1970 (segunda edición, 1979) は、ユカタンにおける身分制社会から階級社会への移行という枠組の中に、カスタ戦争を位置づけ、カスタ戦争におけるインディオの敗北がその後のエネケン・プランテーションによるインディオの包摂を容易にしたことを示そうとした。Nelson Reed, *The Caste War of Yucatan*, Stanford University Press, 1964 は、カスタ戦争の事実経過に関する豊富な情報を提供している。Miguel Alberto Bartolomé, Alicia Barabas, *La resistencia maya, relaciones interétnicas en el oriente de la península de Yucatán*, México, Instituto Nacional de Antropología e Historia, 1977 (segunda edición, 1981) は、クルス・バルランテ出現以降の運動の形態を詳しく調べている。
- 6) 1848年3月25日附の合衆国国務長官ブキャナンあてのメンドス州知事の書簡 (Sierra O'Reilly, *op. cit.*, pp. 105-106)
- 7) González Navarro, *op. cit.*, p. 85.
- 8) パタブは、ユカタン・マヤ語で村落の首長を意味し、カシーケ (cacique) と同義の役職名である。パタブは、村落自治の頂点にあり、カビルド (cabildo) もしくはアユンタミエント (ayuntamiento) と呼ばれる村落会議を統轄していた。ただし、征服後 17 世紀末まで、ユカタンでは、征服以前のマヤ族の貴族階級の存続が法的に認められ、種々の特権が与えられ、パタブの名で呼ばれていた。この間、村落を統治する役職はゴベルナドル (gobernador) と呼ばれた。詳しくは、Ralph L. Roys, *The Indian Background of Colonial Yucatan*, Norman, University of Oklahoma Press, 1972, pp. 129-170 参照。
- 9) 1836年の中央集権的憲法に基づき、州権を抑制し中央にばかり利する政策に反発し、ユカタン州はメキシコからの分離運動を展開した。1840年、ユカタン州議会は、「メキシコが連邦制に復帰しない限りメキシコから独立する」旨の法令を出した。その後 1848年まで、ユカタン州は分離・併合を繰り返した。詳しくは、Albino Acereto, *Evolución histórica de las relaciones políticas entre México y Yucatán*, Mérida, Imprenta Müller Hnos, 1907 参照。

またこの分離運動の際、ユカタン州分離派は、人頭税の減額と教区御布施の廃止を条件にインディオから何度も援助(食糧供給、戦闘への参加)を受けた。しかし、一度も約束は実行されず、インディオの白人に対する不信感を強めた。これが、カスタ戦争の原因のひとつにもなっている。また、反乱軍の組織は、この頃のユカタン民兵組織と極めて

類似しており、分離運動に参加した際に、インディオが学んだのだろう(D. E. Dumond, "Independent Maya of the Late Nineteenth Century: Chiefdoms and Powers Politics," ed. Grant Jones, *Anthropology and History in Yucatan*, University of Texas Press, 1977, p. 106).

- 10) 反乱指導者ハシント・パットの死亡に関する報告書(1850年3月25日)(Leticia Reina, *op. cit.*, pp. 400-401).
- 11) Severo del Castillo, *Cecilio Chí*, Mérida, Editorial del Sureste, 1868, pp. 19-22.
- 12) 1847年8月5日附けの新聞 *Siglo XIX* の記事(Eligio Ancona, *Historia de Yucatán desde la época más remota hasta nuestros días*, Mérida, Edición del Gobierno del Estado de Yucatán, 1889, reimprenta, 1978, Tomo 4, p. 26 から引用).
この記述には、註2)で指摘した、カスタ戦争を人種的粹組で捉えようとする当時の白人側の偏見が含まれているため注意を要する。セシリオ・チは、「ズボンをはいた者は死ぬ」というスローガンで蜂起した。これは、明らかに、肌の色を言っているのではなく、人種的に混血であるなしにかかわらず共同体を離れたメスティソおよび白人の皆殺しを目差したものである。メスティソは白人とともにラディーノ社会を形成し、自己をインディオと区別するために、独自の服装(ズボンをはいていた)をしていたと言われる。詳細については、Oscar M. Pintado Cervera, *Estructura productiva y pérdida de la indianidad en Yucatán en el proceso henequenero*, México, Cuadernos de Casa Chata, 1982, pp. 53-93 参照。
- 13) Serapio Baqueiro, *Ensayo histórico sobre las revoluciones de Yucatán desde el año 1840 hasta 1864*, Mérida, Editorial Yucatanense "Club del Libro", 1950, Tomo 1, primera parte, p. 180.
- 14) Ancona, *op. cit.*, pp. 32-33.
- 15) *Ibid.*, p. 33.
- 16) カヌート・ベラ神父あてのハシント・パットの書簡(1848年2月24日)(Ancona, *op. cit.*, Apéndice pp. VII-VIII). フェリーベ・ロサードあてのハシント・パットの書簡(1848年4月2日)(Leticia Reina, *op. cit.*, p. 399). ミゲル・バルバチャーノあてのハシント・パットの書簡(1848年4月15日)(*Ibid.*, pp. 399-400).
- 17) Ancona, *op. cit.*, p. 117.
- 18) *Ibid.*, Apéndice pp. X-XII.
- 19) Baqueiro, *op. cit.*, p. 97.
- 20) Ancona, *op. cit.*, p. 119.
- 21) *Ibid.*, pp. 137-138.

- 22) ユカタン州政府あてのカンペチェ地区カシーケの書簡(1847年12月21日)(Leticia Reina, *op. cit.*, pp. 393, 397).
- 23) González Navarro, *op. cit.*, p. 81.
- 24) González Navarro, "La guerra de castas y la venta de Mayas a Cuba," *Historia Mexicana*, Vol. XVIII, No. 1, 1969, p. 16.
- 25) ユカタン半島の北西部と中部では、18世紀中頃よりアシエンダが形成されており、すでにかかりのインディオがペオンとしてアシエンダに吸収されていた。アシエンダで働くペオンは、白人の価値観を受け入れ、カスタ戦争の際、白人側に立った。おそらく、「郷土」の称号を得たのは、ラディーノ社会での地位向上を望むペオンであっただろう(Pintado Cervera, *op. cit.*, p. 75)。
- 26) Ancona, *op. cit.*, p. 106.
- 27) Reed, *op. cit.*, p. 104.
- 28) González Navarro, *op. cit.*, 1979, p. 91.
- 29) ランチョ (rancho) という言葉はメキシコでは地域、時代によって使われ方が異なる。ここでは、インディオが村落周辺の土地を占有して作る小集落をさす。
- 30) González Navarro, *op. cit.*, p. 112.
- 31) *Ibid.*, pp. 140-148.
- 32) *Ibid.*, pp. 91-92.
- 33) Reed, *op. cit.*, pp. 127-128.
- 34) Leticia Reina, *op. cit.*, pp. 402-404 に、1850年に資料としてメキシコ大統領に提出された反乱指揮官名とその部下の人数が記されたリストが掲載されている。反乱軍は103の村落で構成され、反乱者総数は8万5091人となっている。後述するように、おそらくこのリストはベリセ総督が反乱指導者に作らせたものと同一のものであろう。なぜなら、オシュクツカブ(Oxkutzcab)村の指揮官ペドロ・ホセ・イシュ(Pedro José Ix)がベリセ総督に村の人数を報告した書簡が残されている。(Gustavo Molina Font, *La tragedia de Yucatán*, México, Revista de Derecho y Ciencias Sociales, 1941, p. 189) それによると、3999人で、リストにある同村の人数と一致しており、指揮官名も同一である。
- ただし、このリストが実際にベリセ総督の手に届いたのかどうか、また、なぜこのリストが州政府の手に渡ったのかは不明である。
- 35) Bartolomé, Barabas, *op. cit.*, pp. 21-22. バルトロメとバラパスは、1840年代におけるユカタン・マヤ族を(1)アシエンダのペオン、(2)共同体成員、(3)ウイトの3つのサブ・システムに分類している。この分類の仕方については、インディオ、メスティソの定義

との関連でなお検討すべき余地が残されている。

- 36) Suárez y Navarro, *Informe sobre las causas y carácter de los frecuentes cambios políticos ocurridos en el Estado de Yucatán y medios que el gobierno de unión debe emplear para la unión del territorio yucateco, la restauración del orden constitucional en la península, y para la cesión del tráfico de indios enviados como esclavo a la isla de Cuba*, México, 1861, recopilada en *Yucatán ante la creación del estado de Campeche*, México, Ediciones Muralla, 1979, p. 17.
- 37) 州財政から教会に一定額(全額で10万ペソ)が支払われることになった(González Navarro, *op. cit.*, p. 64).
- 38) 反乱軍分隊長の書簡(González Navarro, *op. cit.*, pp. 309-310)
- 39) González Navarro, *op. cit.*, p. 80 また, Nancy M. Farriss, *Maya Society under Colonial Rule: The Collective Enterprise of Survival*, Princeton University Press, 1984, p. 387 にカスタ戦争中に破壊された教会の写真が掲載されている。
- 40) 反乱軍分隊長の書簡(1848年2月19日)(González Navarro, *op. cit.*, pp. 309-310).
- 41) カヌート・ベラ神父あてのハシント・バットの書簡(1848年2月24日)(Ancona, *op. cit.*, Apéndice pp. VII-VIII).
- 42) Leticia Reina, *op. cit.*, pp. 238-239.
- 43) González Navarro, *Anatomía del poder en México, 1848-1853*, México, El Colegio de México, 1977 (segunda edición, 1983), p. 36.
- 44) 反乱指導者フロレンティノ・チャンとペナンシオ・ベックの書簡(1849年10月9日)(González Navarro, *op. cit.*, pp. 313-314).
- 45) 反乱軍指揮官フアン・ペドロ・ベッチあてのパウリーノ・ベッチの書簡(1849年10月26日)(Molina Font, *op. cit.*, pp. 187-188).
- 46) Ancona, *op. cit.*, p. 279.
- 47) Gustavo A. Pérez Trejo, *Documentos sobre Belice o Balice*, México, Ediciones del Boletín de la Secretaría de Hacienda y Crédito Público, 1958, pp. 65-66.
- 48) Leticia Reina, *op. cit.*, p. 271.
- 49) Pérez Trejo, *op. cit.*, pp. 41-48 に「ロンドン条約」の全文が掲載されている。
- 50) María Emilia Paz Salinas, *Belice: el despertador de una nación*, México, Siglo Veintiuno Editores, 1979, p. 17.
- 51) O. Nigel Bolland, *Formation of a Colonial Society, Belize, from Conquest to Crown Colony*, London, The Johns Hopkins University Press, 1977, p. 166.
- 52) Paz Salinas, *op. cit.*, p. 95.

- 53) Pérez Trejo, *op. cit.*, pp. 46, 66. 「ロンドン条約」の第14条はインディオへの武器販売を禁じている。
- 54) *Ibid.*, pp. 66-67.
- 55) *Ibid.*, pp. 68-70.
- 56) Justo Sierra O'Reilly, *Segundo libro de mi viaje a los Estados Unidos: la pretendida cesión de la península de Yucatán a un gobierno extranjero*, México, Librería de Manuel Porrúa, S. A., 1953, pp. 148-149.
- 57) 実際、1893年にメキシコとイギリスの全権公使の間で調印された「マリスカル＝セント・ジョン条約 (El Tratado de Mariscal = Saint John)」において、イギリスは、インディオへの武器販売の中止を条件にベリセの領土権を獲得した。この条約の全文は、Pérez Trejo, *op. cit.*, pp. 135-137 に掲載されている。なお、同条約は1897年に、メキシコ大統領ポルフィリオ・ディアス (Porfirio Díaz) により批准された。そして、4年後の1901年に、連邦軍が反乱軍の聖地チャン・サンタクルスを占領し、カスタ戦争が完全に終結した。
- 58) Leticia Reina, *op. cit.*, p. 371.
- 58) Bolland, *op. cit.*, pp. 137-141.
- 60) 反乱軍分隊長シルベストレ・パンアでの反乱軍指導者ベナンシオ・ベックの書簡 (1849年12月2日) (Molina Font, *op. cit.*, p. 188).
- 61) 1840年代のイギリスにおける鉄道建設ブームによって、ベリセからのマホガニーの輸出が増加した。しかし、1847年頃このブームが終わった。しかも、ブームの間に若い木まで伐採してしまったため、マホガニーは涸渇していた。そこで、ベリセ在住のイギリス人はユカタンからの移民が始めたサトウキビ栽培に注目した。詳しくは、Bolland, *op. cit.*, p. 174 参照。また、クルス・パルランテ出現後、多くのクルソブ (cruzob, クルス・パルランテを受け入れた者) が、ベリセのイギリス人の経営するサトウキビ・プランテーションで働いていた。詳しくは、Marie Lapointe, *Los Mayas Rebeldes de Yucatán*, México, El Colegio de México, 1983, pp. 86-93 参照。
- 62) バルバチャーノ知事あての反乱軍指導者フロレンティノ・チャン、ベナンシオ・ベックの書簡 (1849年11月30日) (González Navarro, *op. cit.*, pp. 316-317).
- 63) 反乱軍指揮官ファン・ベドロ・ベッチあての反乱軍指導者パウリーノ・ベッチの書簡 (1849年10月26日) (Molina Font, *op. cit.*, p. 188).
- 64) フロレンティノ・チャンの書簡 (1849年12月30日) (Leticia Reina, *op. cit.*, pp. 401-402).
- 65) Ancona, *op. cit.*, p. 295.

また、クルソブの末裔の一部は、イギリスの援助のもとにユカタンの白人を追放する日が来ると、今なお信じている(Reed, *op. cit.*, p. 275)。こうした幻想にとらわれている限り、彼ら自身カスタ戦争の歴史的意義、とりわけその前期の意味を理解しえないのではないだろうか。

- 66) 調停委員の司祭あての反乱軍指導者フロレンティノ・チャン、ボニファシオ・ノペロ、ベナンシオ・ベックの書簡(1849年11月18日)(González Navarro, *op. cit.*, pp. 314-315).
- 67) 調停委員の司祭あての反乱軍指導者連名の書簡(1850年4月7日)(Leticia Reina, *op. cit.*, pp. 373-375).
- 68) Ancona, *op. cit.*, p. 292.
- 69) Reed, *op. cit.*, pp. 136-137. Bartolomé, Barabas, *op. cit.*, pp. 29-30, González Navarro, *op. cit.*, p. 97 参照。ただし、ブリッカーは、クルス・バルランテの創始者は別人(ベナンシオ・プク)である可能性が強く、少なくともパレーラと確定する証拠はないと指摘している(Victoria Reifler Bricker, *The Indian Christ, The Indian King: The Historical Substrate of Maya Myth and Ritual*, Austin, University of Texas Press, 1981, pp. 106-108).
- 70) 桜井三枝子「19世紀マヤ族の反乱についての一考察」, 大阪外国語大学口承文芸研究会『世界口承文芸研究』第6号, 1985年, 661-666 ページ。
- 71) Bartolomé, Barabas, *op. cit.*, p. 56.
- 72) Bricker, *op. cit.*, pp. 102-103.
- 73) Bartolomé, Barabas, *op. cit.*, p. 56. キンタナロー州の密林地帯は現在でもほとんど開発されておらず、チクレ(チューインガムの原料となる樹液)の採集が主な経済活動となっている。
- 74) 反乱軍指導者フロレンティノ・チャン、ベナンシオ・ベックの書簡(1849年10月9日)(González Navarro, *op. cit.*, pp. 313-314).
- 75) Bartolomé, Barabas, *op. cit.*, p. 36. ベリセからクルソブの地に逃亡してきた「黒人」や「中国人」も、クルス・バルランテを受け入れる限り、クルソブとして受け入れられた(*Ibid.*, p. 38) ことから、クルソブ集団に一種の「開放性」もしくは異人種に対する寛容さを見ることは可能である。しかし、これは、クルス・バルランテ出現以前にも言えることであり、カスタ戦争が人種にかかわらず、共同体に帰属する者(インディオ)による反乱である限り、当然である。
- 76) Bolland, *op. cit.*, pp. 126-127, Bricker, *op. cit.*, pp. 115-117, Dumond, *op. cit.*, pp. 108-128 参照。

77) 現在でもキンタナロー州に住むクルソプの末裔は自らを「マセワル(macehual)」と称し、その他のマヤ族を「マジェーロ (mayero, マヤ語を話す人)」と呼び自分達と区別している (Bartolomé, Barabas, *op. cit.*, p. 115.). そして、バルトロメとバラバスは、言語を規準にユカタン・マヤ族を一つの単位として捉えようとする官製インディヘニスムを批判している。ユカタン半島のインディオに見られるアイデンティティーの多元性を考えると、この批判は確かに的をえたものである。しかし、こうした諸集団間の分裂や対立を固定したものとして捉えてしまうことにも問題があるだろう。それは、白人の侵入に対するインディオの抵抗の過程で生じた歴史的所産であるからだ。そして、それは近代ヨーロッパ的価値体系への完全同化を拒むために抑圧と差別に甘んじているインディオが払った、もうひとつの大きな犠牲であったと言えよう。

